

新会員の声



進んでこつこつ 最後まで!

新地町立駒ヶ嶺小学校 五十嵐 隆之

校庭の西方には「白幡のいちよう」が朝日を浴びて輝いています。樹齢260年・樹高25mの巨木は、遠くから見ても荘厳な風格があります。

ミニキャンパス風の校舎には、タブレットを使いこなす子どもの姿〔ICT教育〕、学校を花でいっぱいにする子どもの姿〔緑化活動〕、地場産物を使ったおいしい給食を通して学習する子どもの姿〔食育〕があります。先生方も、未来を創る子どもたちの夢を育み、可能性を伸ばすことを目指して「チーム駒小」で教育活動を全力で推進しています。

今年度の本校の重点目標は「進んで〈主体〉こつこつ〈継続〉最後まで〈徹底〉!」です。知的好奇心を揺さぶる学習やワクワク感のある活動を継続・徹底することで、子どもたちの笑顔があふれる学校づくりを進めていきたいと思ひます。校長会の皆様のご指導とご助言をよろしくお願ひいたします。



感謝の気持ちで 一歩ずつ

南相馬市立太田小学校 佐々木 信晴

朝、昇降口に立っていると、登校してくる子どもたちが「おはようございます」と元気に挨拶してくれます。その挨拶は、私だけにとどまらず、掃除をしてくれている用務員さんにも「ありがとうございます!」……。太田小学校の子どもたちはとても素敵です。そのような子どもたちを見守り、指導する先生方も、少人数ながら前向きで一歩懸命。そして、学校の周りの豊かな森に住む鳥たちも、きれいな声でさえずり、太田小学校を応援してくれているようにさえ感じます。この数ヶ月で、太田小学校の『大ファン』になったことは、間違いありません。

新任校長として右も左もわからない私に、適切なアドバイスをいただいております相馬地方の先輩の校長先生方には、感謝の言葉しかありません。今後も一歩ずつ精一杯頑張りたいと思ひます。ご指導よろしくお願ひいたします。



恩師からの手紙

相馬市立大野小学校 織田島 賢嗣

「やって見せ、言っで聞かせて、させてみて、ほめてやらねば、人は動かじ。話し合い、耳を傾け、承認し、任せてやらねば、人は育たず。やっでいる、姿を感謝で見守って、信頼せねば、人は実らず。」

教育や職場に生かせる示唆に富んだ山本五十六の言葉です。私にこれができるか、反省の毎日です。

大野の子どもたちを心豊かに、たくましく育てたい。先生方には、明るく、情熱を持って子どもたちと向き合ってもらいたい。思ひだけが高まる一方、コロナ対応に右往左往する私のもとへ大学の恩師から一通の手紙が届きました。「…新任校長ということで何かと気苦労も多いことなのでしょうが、ゆっくり、のんびり行くことが肝要かと思ひます。…」

子どもたちに寄り添い、焦らず、感謝の気持ちでチームとしての学校づくりを進めていきます。校長会の皆様からのご指導をよろしくお願ひいたします。



咲き誇るツツジの花(6月鹿島)

編集後記

「広報そうま」第137号の発行にあたり、ご多用の中、玉稿をお寄せいただきました相双教育事務所長様をはじめ、諸先生方に厚く御礼申し上げます。本当にありがとうございます。今年度1学期も新型コロナウイルス感染症への対応を考慮しながらの学校経営でしたが、これからも校長会の組織を生かし、子どもたちの学びや活動をしっかり保障していくことができるよう学校経営を進めてまいりたいと思ひます。



令和4年7月14日
相馬地方小学校長会
第137号
発行責任者 渡邊 義人
編集責任者 郡司 幸一
発行所 ライト印刷



おりんの音

福島県教育庁相双教育事務所長
横山 修

3月に母が亡くなった。葬儀屋が「四十九日までには仏壇を用意した方がいい」と言うので、まず仏壇を買った。併せて、おりんなどの仏具も買った。おりんは、いくつかを鳴らしてみても、いい音だなと感じる物を選んだ。

毎朝、寝ぼけ眼をこすりながら、仏壇の前に腰を下ろす。線香に火をつけ、チーンとおりんを鳴らし、手を合わせる。これを繰り返すうちに、ふと疑問が湧いた。なぜ、おりんを鳴らすのだろうか。仏様に自分の存在を知らせるためという理由がまず思ひ浮かんだ。「息子が拝みに来たよ。朝だから起きてちょうだい」というわけだ。

しばらくして、妻にも聞いてみた。「あなたは思うの」と言うので、先ほどの理由を答えると、「違うと思うよ」と言う。「じゃあ、なぜ」と問ひ返すと「お念仏の調子を整えるためとかじゃないの。知らないけど。でも、仏様、起きろみたいなのは違うと思う」と全否定された。

もやもやしたまま何日かが過ぎた。ある日、このチーンという音を聞いていると、澄んだ余韻に心が洗われ、素直で落ち着いた気持ちになることに気づいた。もしかするとこれが理由なのではないか。正解ではないかもしれないが、こう考えると妙にすっきりする。勝手に正解だと思ひことにした。

仏様を起こしてやろうとは何と傲慢なことか。教員を長くやってきたせいか、自分のことはさておき、相手を何とかしてやろうと思ひ癖がついているのだろう。毎日チーンとおりんを鳴らして、自分の心を洗うことにしようと思ひます。そして、素直な落ち着いた気持ちで人に接すれば、先生方や子どもたちの声ももっと聞こえるに違ひない。



今年こそは…

相馬地方小学校長会長
渡邊 義人

昨年度のことである。本校は、「相馬地方小学校教育研究会図画工作科研究校」3年目、福島県の「教科担任制推進校」2年目、さらに「AI時代を生き抜く読解力向上事業(リーディングスキル)研究校」1年目と3つの研究校を兼ねていた。それぞれに研究公開(すべて2学期)があった。

私は、着任1年目であったので、十分な指導助言はできなかったが、そんな私を助けてくれたのが、教頭と教務主任である。休み時間や放課後に、3つの研究のそれぞれの担当者に声をかけたり、担当者からの問いかけに丁寧に応じたりする教頭や教務主任の姿がよく見られた。また、本校教員は、担当者を中心に前向きに3つの研究に取り組んだ。私は校内授業研究会での、さらにより授業をしたいという向上心の高さや、ベテランと若手の区別なく同僚間で学び合う教員の姿にとても感心した。そして、2学期、3つの研究の公開を終えた本校教員の表情には、達成感と成就感があった。

3つの研究の同時進行であり、本校教員は大きな負担を感じていたに違ひないが、このように前向きに研究に取り組むことができたのは、教員一人一人の向上心の高さであることは言うまでもない。そして、意欲に火をつけ、向上心をさらに高めたのは、教頭と教務主任、それぞれの担当者であった研修主任と学力向上主任である。本来は校長の役目であったが、私が出る幕はなかった。校長として本校で勤務できるのもあと1年。守られているという安心感を与えると同時に、目標達成に向けて挑戦する意欲をもたせるセキュアベースリーダーとして、今年こそ私の力で本校教員の向上心をさらに高めたい。

私の学校経営

陸上記録会男子リレーをどうするか

新地町立福田小学校 佐々木 芳三郎

昨年度、町陸上記録会へ参加するにあたっての出来事です。「リレー男子チームをどうしたらよいでしょうか。」6年担任からこう相談を受けました。本校6年男子は2名のみです。6年生のためにどうすればよいのか、担任と2人でいくつかの案を考えましたが、我々が考えるのではなく子どもたちにこの問題を任せてみてはどうかと担任に提案しました。そしてどんな考えであっても子どもたちが出した結論を尊重しましょうと担任と確認しました。子どもたちが話し合い、出した答えは「女子リレーの補欠選手2人を男子チームに入れる」でした。すぐに大会事務局に掛け合い、男女混合チームの出場を了承していただきました。本番のレース後、クラス全員で選手の健闘を称える感動的な姿が見られました。

本校の子どもたちは「受け身」で「他人任せ」の



面が見られます。「主体性、積極性が乏しい」という課題も以前から挙げられています。先生方とはつねに「少なくとも我々は子どもの主体性を奪う指導は行わないこと」を確認しています。

未来社会は予測困難で正解のない時代。問題を自分事として捉え自分なりに考え、他者との対話をとおして納得解を導く「自律的」で「創造的」な生き方が望まれます。そのためには、時間はかかっても対話や自己決定の場を大切に、子どもの思いや考えを可能な限り尊重していきたいと考えています。

学校紹介

山上っ子の新たな挑戦

相馬市立山上小学校 旗野 礼子

「朝は塩手の峰に明け、夕べは宇多の瀬に暮れる」校歌のとおり、自然豊かな相馬市西部にある山上小学校は、来年で創立150周年を迎える。心温かな地域・保護者の皆様に見守られながら、21名の山上っ子たちは健やかに、伸び伸びと育っている。

朝マラソンから始まる山上っ子の日常に今年度から新たに加わったのが、「山上小・相馬土垂を守る会」の活動である。ことの発端は、令和2年秋、子供たちが大切に栽培してきたサツマイモが猪に食い荒らされ、全滅したことにある。昨春、「相馬土垂は、猪被害に遭いにくい」との情報を得た5・6年生たちは、早速地域の農園さんに手紙を書き、協力を得て相馬土垂栽培を開始した。栽培する中で、相馬土垂は相馬市唯一の伝統野菜であること、相馬土垂は一度廃れ絶滅の危機に瀕していたこと等を知り、相馬土垂を守るために自分たちにできることはないかと考え、試行錯誤しながら活動を開始した。無事に

収穫した後は、自分たちがレシピ開発した料理を味わうと共に、PR活動（CM作り、創作劇の発表、パンフレット作成と配付）を行った。さらに今年度は、より多くの方々に相馬土垂を知ってもらえるよう5・6年生をリーダーに全校児童で「山上小・相馬土垂を守る会」活動に取り組んでいる。

「相馬土垂」との出会いをきっかけに始まった山上っ子の新たな挑戦。これから大きく育ちます！



随想

校長の限界を学校の限界にしてはいけない

相馬市立飯豊小学校 木村 裕之

「校長の限界を学校の限界にしてはいけない。」この数年間の出会いでは、最も刺激的な言葉です。ある自治体の教育長さんが、ICTの活用促進を図るために使っておられました。これは、「学級担任の限界を学級の限界にしてはいけない。」「教育の限界を子どもの学びの限界にしてはいけない。」に置き換えることができます。ゆえにこの言葉は、ICTに留まることなく、学校教育すべてに通じる至言として、私の心に刻みつけられました。

私たち教員は、子どもたちの学習環境をつくり、学校という場においてルールをつくる立場にあります。学習環境はそこに「ある」ものではなく「つくっていく」ものです。学校は、子どもたちが未来を生き抜くための知恵を獲得する場であり、様々な役割の人たちや異なる価値観をもった人たちと共に、社会の中で生きていく相互扶助の精神を培う場です。そのような学校の役割を考えれば、私たち教員こそ、未来を見据え、社会の変化に対して敏感でなければならないと再認識することができました。そのためには、前例にとらわれすぎず、柔軟な発想をもち、かつ果敢に、学習環境の充実・教育活動の充実に励んでいかなければならないと思いました。子どもたちの素晴らしい成長は、私たちの未来であり、私たち大人の希望です。そして私たち教員の何よりの喜びであり、何事にも代えがたいやがいです。学校において、そんな子どもたちに、「学びの限界をつくらせないこと」を使命感として取り組んでいくことが、大人として、教員として果たしていかなければならない責任であると肝に銘じ、精進を重ねていきたいと思えます。

子どもに寄り添う母親から学ぶ

相馬市立磯部小学校 永井 崇

古い話になりますが、今から10年近く前、とある公園で偶然見かけた母娘の姿が、未だに私の記憶から離れません。定かではありませんが、当時娘さんは1歳くらいだったでしょうか。花が綺麗に咲き誇る公園での出来事。娘さんは興味がある花を見ようと、幼い足取りで一心に歩み出したところでした。すると、その母親は娘さんが行く方向と一緒に走り出して、子どもが見ている花と一緒にしゃがみながら見ていました。そして、母娘共に笑顔で楽しそうに何かを話していました。この母娘の一連の流れを見ていて、この母親のようにになりたいという憧れの気持ちになりました。このような場でよく見かけるのは「だめ！こっちに来なさい」という親の声。実際に、その公園でも多くの親は子どもの行く手を遮っていました。従って当然、私もそのような声を聞くのだらうなと思っていましたが、良い意味での期待外れでした。加えて、このような環境下で育てられた子どもは、今後どのような成長を遂げるのか興味があるところです。よく子どもの世界を広げるという言葉に耳にしたり、簡単に言ったりしがちですが、実は大変難しく、私自身は実現できなかったという後悔の念しかありません。しかし、この母親のように「子どもの思いに寄り添い」育てることが、子どもの世界観や可能性を広げ、さらには母親の価値観や観照観も広げていくことにもなるのだらうと感じました。最近では、自分の世界観を子どもに押しつけ、親からの暴力等が増加傾向にあり、悲しい知らせが多い中、このような母親像は、どこか心が洗われ清々しい気持ちになったことを覚えています。今でも私自身の憧れの姿になっています。

